て、からふと島に漂著す、時に寶曆十二年六月廿一日也、船頭德五郎いづくとも玄らざれば、たゞ忘然として、昊天を望むのみ、數日滯留の內、鳥の翔霄を視るに、鴨とをぼしき鳥の、辰巳の方位を指て翔びゆくを見て、彼鳥は日本に徘徊する鳥也、每年秋には集るなれば、辰巳の方位に日本あるべしといひ、夫より十八日を經て人里あり、此時九月十八日也、此處は蝦夷地シラヌレといふ村也、此節既に雪ふりたりと見へたり、予○德內常矩竊に考ふるに、カラフト島の內タライカとヲッチンとの間に漂著せると思はるゝ也、此等を察し日本の舶師の未熟を推量すべし、猶島の廣太なる事を思ふべし、扨又天明丙午年夏、大石逸平といふ者、カラフト島の地方廣狹遠近、及諸產及人物等の撿查の爲に渡海せり、濱邊傳ひに段々と巡撿するに、ナヨロ村に至る所の乙名ヤエンコロアイといふ、此者の父の名はヤウチウテイといひし、死去して悴ヤエンコロアイの乙名をする也、父のヤウチウテイは山丹國に涉海し、又松前所在島西蝦夷地ソウヤ村に涉海し、交易を博くせしもの也しが、先年山丹國に涉海せし時に、滿州の官人來居り、ヤウチウテイといふ名を授けたりといへり、其官人有三身の龍を織たる官服を著したる人也といへり、安永七戊戌年、松前家臣工藤清左衞門上乘役にてソウヤに往し時に、彼ヤウチウテイ交易の爲ソウヤ村に來り居たる故、工藤清左衞門此蝦夷人の名を貰ひたる事を尋るに、楷書に楊忠貞と書たる唐紙の一軸を出したり、清左衞門此始末を見て、山丹からふと兩國の精しきに依て、山丹國の地圖を書記とはせければ、大小島都て六箇所を畫したり、イチヤ　ホットン　スムク　タムル　ハアトメ　スチヤトシリ　以上六島なり、所在の體は詳ならずといへども、猶識者の比校をまつ、又蝦夷土人山田久左衞門といふ通詞ソウヤにゆきたるとき、カラフト島の土人よりもらひたる墨跡の一幅を、予精しく聞に、其書法日本の三社の詫に似たりといふ、大字と小字とに書記せし物にて、大字は楷書にて、小字は變字體にて、上と中と下とに三段に朱印を居たる物也といへり、予